

講義による血液型性格判断に対する態度の変化 —対面講義・オンライン講義での検討—

織 田 弥 生
菊 地 賢 一

実践女子大学人間社会学部

紀 要 第18集 抜刷

2022年 3 月 31 日発行

講義による血液型性格判断に対する態度の変化 —対面講義・オンライン講義での検討—¹

織田弥生

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

菊地賢一

東邦大学理学部

要約

本研究は講義によって血液型性格判断に対する態度が変化するかを検討することを目的とした。調査は都内女子大学において2019年度に対面講義 ($n = 40$, 平均年齢20.2才), 2020年度にオンデマンド講義 ($n = 47$, 平均年齢20.1才) で実施された。参加者は授業の一環として血液型性格判断を否定する内容の講義を受講し, 講義前, 講義後, 講義4週間後に「血液型と性格に関連があると思うか」について4段階で回答した。4段階の回答を否定的態度・肯定的態度に分類し, 各年度別にコクランのQ検定を実施した。その結果, 2019年度(対面講義)は講義前から講義後にかけて有意に否定的態度の割合が増え, そのまま4週間後も有意な変化はなかった。2020年度(オンデマンド講義)は講義後に有意に否定的態度の割合が増えたが, 4週間後には講義前と有意差がなくなっていた。これらの結果から, 講義によって講義後の態度は血液型性格判断に対して否定的に変化するが, 長期的な効果は講義の形式によって異なる可能性が示唆された。また, 肯定的態度の人は自身の態度の理由として一貫して個人の経験を挙げていることから, 経験に対するアプローチの必要性が示唆された。今後も講義等を通して正しい情報を伝えていく必要があると考えられた。

序論

血液型(ABO式)と性格に関連があるという考え方は, 「血液型ステレオタイプ」, 「血液型性格診断」, 「血液型性格関連説」などと呼ばれている。本論文では「血液型と性格に関連がある」という考え方を「血液型性格判断」と呼ぶこととする。現在のABO式の血液型による性格判断は, 初期の古川(1927)の論文に始まり, 何回かのブームを経て現在も広く認知されている(佐藤・渡邊, 1992; 上村・サトウ, 2006)。血液型性格判断に肯定的な人の割合は, 1985年12月に毎日新聞社が全国の20才以上に対して行った世論調査(白佐, 1991より引用)で64%, 佐藤(1993)

が大学生の男女を対象に行った調査で47%、上瀬・松井（1996）が女子大学生を対象に行った調査で71.6%、サトウ・上村（2004）が男女専門学校生を対象に行った調査で34.9%と報告されており、調査年度・年代・性別・質問の方式などによって異なるが、一定の割合の人が肯定していることがわかる。また伊藤（1996）が小学生を対象に行った調査では学年が高くなるにつれて肯定する割合が増え、男子より女子の方が肯定する割合が高いことが報告されており、6年生男子で22.5%、女子で50%が肯定している。このように血液型性格判断は広い世代に浸透していると考えられる。

心理学の研究においては、血液型と性格に関連があるという信頼できるデータはないことが今まで繰り返し示されている。松井（1991）は日本に在住する13才から59才までの成人から無作為抽出された大規模な調査データを解析対象とし、複数の年度において血液型と性格との関連について検討した。分析対象としたのは血液型に関する質問と性格に関する24の質問項目を含んだ社会調査のデータ4年度分であり、それぞれ3,000名前後、延べ12,418名のデータを用いた。分析した24項目に「はい」と回答した比率を統計的に解析したところ、4年度共通で血液型に有意差が見られたのは1項目（物事にこだわらない）のみであった。また当該項目の肯定率が最も高かったのは、実施年度順にB型、O型、AB型、B型と、一貫していなかった。この研究は無作為に抽出された信頼性の高いデータを用いており、また複数年度の結果を比較して一貫性も確認している。この結果から、松井（1991）は血液型ステレオタイプは妥当性を欠くと結論付けている。

縄田（2014）は血液型と性格が無関連であることを積極的に示すために、2004年度日本、2005年度日本、2004年度アメリカの3セットの社会調査のデータを用い、各年度について5段階評価された性格に関連する項目（各データセット21項目から26項目）について血液型の差を分析した。3セットの解析対象データのサンプル数は約2,900から3,700と十分に大きいものであった。解析の結果、血液型間で有意な差が見られたのは、2004年度日本のデータでは21項目中1項目、2005年度日本のデータでは26項目中0項目、2004年度アメリカのデータでは21項目中2項目のみであった。わずかな差でも検出できるはずの大規模データにもかかわらず、ほとんどの項目で有意差が見られなかったこと、68項目もあれば無関連であっても偶然に有意な差が得られる可能性が高くなること、有意差があった項目も効果量が極めて小さいことから、縄田（2014）は血液型と性格の無関連性が強く示されたと述べている。

以上のように、心理学においては血液型と性格には関連が無いと考えられている。しかし前述の通り、実際には血液型と性格に関連があると思っている人は多い。客観的なデータが無いにもかかわらず血液型性格判断を信じる人が多い理由については、自分の性格の認知における誤謬（バーナム効果、ラベル付け、自己成就予言など）、対人認知における誤謬（ステレオタイプ）、統計的な発想の欠如、偏見・差別としての血液型など、様々な要因が指摘されている（宮本・田村、1995）。

血液型性格判断を信じる上記以外の要因の一つとして、メディアからの情報の影響が考えられる。山岡（2011）は1999年・2005年・2009年に、各血液型の持つイメージや、血液型性格判断により何らかの嫌な思いや不快な体験をしたことがあるかを尋ねる調査を実施した。その結果、多数派のA型・O型に比べ、少数派のB型・AB型のイメージが悪かった。またB型のイメージは

2005年が最も悪く、AB型のイメージは年を追うごとに次第に良くなっていた。不快な体験をした人の割合もこれと連動して変化しており、B型では2005年が最も多く、AB型では年を追うごとに減少していた。「嫌いな血液型」については、B型以外の血液型ではB型を選択した率が最も多く、特にA型でその傾向が顕著であった。B型ではA型を選択した率が最も多かった。この傾向は2005年が最も顕著であった。山岡（2011）はこの変化の原因を、2004年に集中的に放送された血液型性格判断関連のテレビ番組である可能性が高いと指摘している。2004年頃のテレビ番組ではAB型を天才と称し、B型を否定的に扱い、A型とB型の相性が悪い、としていた番組が多かった（山岡、2006）。その結果としてAB型のイメージが向上し、B型のイメージが悪くなり、A型とB型が互いに嫌悪するようになったと推察される。このように、血液型性格判断に対する態度には、メディアからの情報の影響も大きいと考えられる。

ここで問題となるのは、「血液型と性格に関連がある」という情報はメディアを通して多く流れているが、「関連がない」という情報は一般的なメディアではほとんど流れていないという点である。もし情報に接する機会がないことが原因であれば、大学の講義等を通して正確な情報を与えれば、血液型性格判断に対する態度が変わる可能性がある。上瀬・松井・古沢（1991）は女子短期大学生96名に対して血液型性格判断を否定する内容の講義を実施し、講義の前後で血液型性格判断に対する態度に関する質問紙調査を実施した。その結果、講義前は「血液型によって性格は非常に異なる」、「かなり異なる」、「やや異なる」という肯定的な態度の人が83%であったのに対し、講義後は18%と減少していた。講義前に回答した血液型性格判断を否定する理由としては、「論理的理由（人の性格が4タイプしかなくなる、性格は血液型よりも環境などによってつくられる、など）」が回答件数の6割であったが、肯定する理由は「経験的理由（周りの人で当たっている人が多い、同じ血液型だと性格が似ている、など）」が9割であった。講義後には否定する理由の約9割が「論理的理由」となり、肯定する理由は「関係しないとわかったが、なんとなく信じてしまう」が約半数、「経験的理由」が約3割であった。この研究は講義前後の比較であったが、上瀬・松井（1996）は長期的影響についても検討している。彼らは女子大学生104名を対象に血液型性格判断を否定する内容の講義を実施し、講義前、講義後、3か月後に血液型性格判断に対する態度を質問紙で測定した。その結果、「信念強度（項目例：血液型によって性格は異なる、血液型性格判断は信用できる、など）」の尺度得点は、講義前と比較して講義後及び3か月後で低下していたが、講義後と3か月後を比べると3か月後の方が得点が有意に高く、態度が元に戻る傾向が見られた。より詳細な検討を行うため、講義後の血液型性格判断に対する態度に関して、「サブタイプ（講義で否定されたのは血液型性格判断の一部である、自分が血液型性格判断について信じていたのは講義で否定された部分とは違う、血液型性格判断は今のところ否定されているがいずれは科学的に証明される、の3項目）」尺度の得点の高い群（サブタイプ形成群）と低い群（サブタイプ非形成群）に分けて比較を行った。その結果サブタイプ非形成群では「信念強度」の尺度得点が講義後及び3か月後において低下し、2時点の間に差が見られなかった。一方、サブタイプ形成群では講義後及び3か月後において低下していたものの、3か月後には態度が元に戻る傾向が見られた。これらの結果から、上瀬・松井（1996）は講義によって態度の変容が生じること、またサブタイ

プを形成するものについてはステレオタイプが維持され、3か月後には元の態度に戻る傾向があることを指摘している。

一方、効果が見られなかったとする研究もある。サトウ・上村（2004）は男女の専門学校生63名に血液型性格判断を否定する講義とテレビ番組の視聴（所要時間約1時間）を実施し、その前後で血液型性格判断に対する態度を測定する質問紙を実施した。その結果、項目の平均値レベルでは差が見られず、各項目を細かく検討した結果、肯定から否定に変化した割合は19.0%であった。一方、否定から肯定に変化した割合は26.9%となり、効果はみられなかったと報告している。

以上のように、血液型性格判断に対して否定的な講義を実施することによって血液型性格判断に対する態度が肯定的な態度から否定的な態度に変化するかどうかに関しては、効果があるという報告と、ないという報告が混在しており、その効果については検討の余地があると考えられる。まず効果の持続期間については、上瀬・松井（1996）以外の研究は講義の前後の測定のみ行っており、長期間の効果についてはあまり検討されていない。次に態度の変化の測定についてである。上瀬・松井・古沢（1991）は、講義の前後で血液型性格判断に対する態度が肯定的か否定的かの比率を示している。しかし上瀬・松井（1996）は血液型性格判断に対する態度を尺度の得点で測定しており、単純に血液型性格判断に対して否定的か肯定的かという比率は講義前しか示されていないため、講義後や3か月後に否定的な態度の人が増えたかどうかについては不明である。サトウ・上村（2004）の研究についても、講義前の態度については回答率を出しているが、否定的・肯定的方向への変化に関しては項目を分析したと述べるのみで、実際にどのような項目がどのように変化したのかは不明である。最後に講義形態についてである。近年様々な社会情勢から、大学においてオンラインでの講義が増えているが、先行研究はいずれも対面講義で実施されたものである。今後の講義形態の多様化を考えると、オンライン講義における検討も必要であると考えられる。

本研究の目的は、血液型性格判断に対する態度を「否定的」「肯定的」の比率で測定し、講義によって態度が否定的に変化するかを検討することである。方法として、血液型性格判断を否定する講義を実施し、講義の前後で血液型性格判断に対して否定的に考えるか、肯定的に考えるかの態度を回答させ、短期的効果（講義前・講義後）、長期的効果（4週間後）を検討する。講義形態としては、対面講義とオンデマンド講義を検討する。また、血液型性格判断を否定・肯定する理由について各測定時点において自由記述を求め、否定的態度・肯定的態度との関連を検討する。最後に、血液型性格判断を否定する講義を学生がどのように捉えたのかを自由記述を元に分析する。

方法

参加者

都内女子大学で2年生から4年生を対象に行われる「教育・学校心理学（2019年度は「教育心理学」）」の履修者を対象とした。調査への参加は任意であること、結果は統計的に処理し、個人データは公開しないことを教示し、同意した人のみ調査に参加した。調査参加者は2019年度（対面講義）40名（平均20.2才）、2020年度（オンデマンド講義）47名（平均20.1才）の女子学生で

あった。実際にはもっと多くの参加者がいたが、全ての回の質問に回答した人のみを解析の対象者とした。

講義内容

講義は、2019年度は対面、2020年度は動画によるオンデマンド（動画が公開されてから1週間以内に視聴）で実施された。各年度の半期の授業の内、1回分を用いた。講義の要素は①パワーポイントによる講義、②ニュース映像からなり、2019年度の対面講義では①、②の両方、2020年度のオンデマンド講義では①のみを用いて講義を行った。①、②の詳細な内容は以下の通りである。

① パワーポイント（対面：約60分、オンデマンド：約40分）

宮本・田村（1995）を参考に、下記の（1）から（3）の内容の講義をパワーポイントで作成した。対面講義では教員がプロジェクターで教室のスクリーンに投影した画面を用いて説明し、参加者はパワーポイントのスライドの一部が空欄となった配布資料を用い、自分で空欄を記入しながら受講した。オンデマンド講義では、パワーポイントに音声を録音したものを動画として配信し、参加者はパワーポイントのスライドのpdfファイル（空欄なし）をオンラインで配布された。

（1）血液型性格判断の歴史

（2）「血液型と性格に関連はない」研究の紹介（松井,1991; 縄田,2014）

（3）血液型と性格の認知に関連する要因

- ・自分の性格の認知における誤謬（バーナム効果、ラベル付け、自己成就予言など）
- ・対人認知における誤謬（ステレオタイプ）
- ・統計的な発想の欠如
- ・偏見・差別としての血液型

② ニュース映像（対面：約10分、オンデマンド：無し）

2007年5月1日にTBSイブニングニュースで放送された、血液型性格判断は根拠がないことを説明した特集映像（歴史の説明、生物化学者や心理学者の解説、ランダムに出される診断結果を信じてしまう人の映像など）を用いた。

質問内容および回答方法

アンケートアプリ「respon」を用いて、「血液型と性格は関係すると思いますか？」という質問について、「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. ややそう思う」「4. そう思う」の4段階で回答し、そのように考える理由を自由記述で回答した。講義後のみ、講義の感想についても自由記述で回答した。

手続き

参加者は半期の授業中の1回分の講義として「講義内容」に示した内容の講義を受講し、その前後に質問に回答した。

2019年度の対面講義においては、参加者はパワーポイントのスライドの一部が空欄となった配

布資料を用い、自分で空欄を記入しながら「講義内容」に示した①パワーポイントによる講義②ニュース映像（合計約70分）の講義を教室で受け、講義直前（以下、講義前）、講義直後（以下、講義後）、4週間後の別の講義後（4週間後）の3回、血液型と性格は関係すると思うか、またその理由を回答した。講義後のみ、講義の感想を回答した。

2020年度のオンデマンド講義においては、参加者はパワーポイントのスライドのpdfファイル（空欄なし）をオンラインで配布され、「講義内容」に示した①パワーポイントに音声を入れた動画（約40分）のみを、公開から1週間以内の自由な時間に視聴した。当該講義の1週間前の講義動画視聴後（以下、講義前）、当該講義動画視聴後（以下、講義後）、4週間後の別の講義動画視聴後（4週間後）の3回、血液型と性格は関係すると思うか、またその理由を回答した。講義後のみ、講義の感想を回答した。「講義前」の回答を当該講義の1週間前としたのは、当該講義日に回答させた場合、講義の動画を見る前に回答することが保証されない（動画を見た後に回答する人がいる可能性がある）と考えたためである。オンデマンド講義および回答は視聴や回答に1週間の猶予があったため、オンデマンド講義における「講義前」と「講義後」の間隔は、最も短くて1日、最も長くて2週間の可能性があった。また「講義後」と「4週間後」の間隔は3週間～5週間の可能性があった。手続きをまとめたものを図1に示した。

測定	対面講義 (2019年度)	オンデマンド講義 (2020年度) ※視聴可能期間：1週間	オンデマンド 講義の場合の 可能な回答間隔
講義前	講義直前	1週間前の 講義動画視聴後	1日 ～2週間
	①パワーポイント授業 ②ニュース映像 (約70分)	①に音声を入れた 動画（約40分）	
講義後	講義直後	講義動画視聴後	3週間 ～5週間
4週間後	4週間後の 別の講義後	4週間後の別の 講義動画視聴後	

図1 対面講義とオンデマンド講義の手続きの概略図

解析

血液型性格判断に対する態度の変化

4段階の回答について、「1：そう思わない」「2：あまりそう思わない」を否定的態度、「3：ややそう思う」「4：そう思う」を肯定的態度と分類し、年度別に各測定回の否定的態度・肯定的態度の比率についてコクランのQ検定を実施した。コクランのQ検定が有意だった場合、ペアごとにマクネマー検定による多重比較を行った。p値にはBonferroniの調整を行った。

否定的・肯定的な態度の理由の自由記述の分類

分類は第1著者が行った。まず参加者の自由記述の内容を似た記述同士に分類し、まとまり毎

に「授業で学んだ」、「自分や身の回りの人にあてはまらない人がある」等の項目名をつけた。次に各項目に内容が該当する回答数をカウントし、参加者人数に対する%を算出した。一人の記述に複数の内容が含まれている場合は、それぞれの項目でカウントした。項目名「授業で学んだ」に関しては、記述中に授業という言葉が明記されていなくても、日常生活では用いないような心理学の用語（バーナム効果、自己成就予言、など）が書かれている場合はカウントした。

次に項目を代表するようなカテゴリ名を作成した。カテゴリ名は、血液型性格判断に否定的な理由として「授業」、「根拠がない」、「自らの経験」、「サブタイプ」、「メディアからの情報」、「その他」、肯定的な理由として「自らの経験」、「メディアからの情報」、「サブタイプ」、「その他」とし、各カテゴリは1~3項目で構成した。最後に、各カテゴリに該当する項目の%を合計し、各カテゴリの%とした。

講義の感想の自由記述の分類

分類は第1著者が行った。否定的・肯定的な理由の分類と同様に、まず参加者の自由記述の内容を似た記述同士に分類し、まとまり毎に「面白かった」、「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」等の項目名をつけた。次に各項目に内容が該当する回答数をカウントし、参加者人数に対する%を算出した。一人の記述に複数の内容が含まれている場合は、それぞれの項目でカウントした。

結果

血液型性格判断に対する態度の変化

表1、図2に2019年度（対面講義）の講義前、講義後、4週間後の血液型性格判断に対する否定的態度・肯定的態度の人数と比率の変化を示した。各測定回の否定的態度・肯定的態度の比率についてコクランのQ検定を実施したところ有意な差が見られ（ $Q_{(2)} = 20.609, p < .01$ ）、多重比較の結果、講義前と講義後（ $\chi^2_{(1)} = 13.474, p < .01$ ）、講義前と4週間後（ $\chi^2_{(1)} = 7.579, p < .05$ ）に有意差が見られた。すなわち、否定的態度の割合は講義前から講義後にかけて有意に増加し、4週間後も維持された。

表1 講義前、講義後、4週間後の否定的態度・肯定的態度の人数の変化
(2019年度・対面講義)

	講義前		講義後		4週間後	
そう思わない	11	否定	21	否定	21	否定
あまりそう思わない	8	19	15	36	11	32
ややそう思う	17	肯定	4	肯定	8	肯定
そう思う	4	21	0	4	0	8

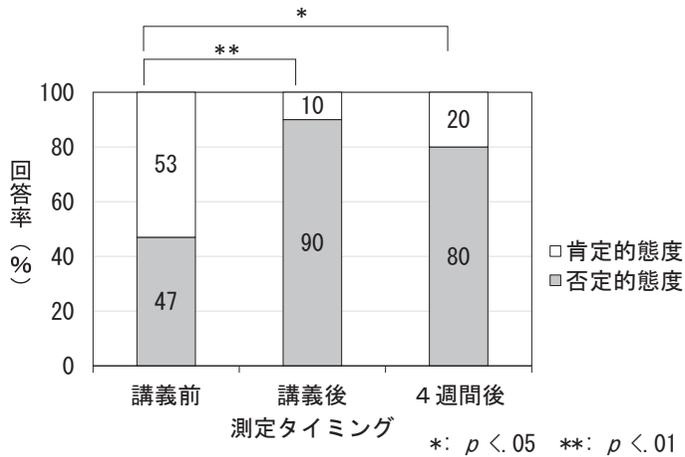


図2 講義前、講義後、4週間後の否定的態度・肯定的態度の比率の変化(%)
(2019年度・対面講義)

表2、図3に2020年度(オンデマンド講義)の講義前、講義後、4週間後の血液型性格判断に対する否定的態度・肯定的態度の人数と比率の変化を示した。各測定回の否定的態度・肯定的態度の比率についてコ克蘭のQ検定を実施したところ有意な差が見られ($Q_{(2)} = 23.238, p < .01$)、多重比較の結果、講義前と講義後($\chi^2_{(1)} = 16.056, p < .01$)、講義後と4週間後($\chi^2_{(1)} = 5.786, p < .05$)に有意差が見られた。すなわち、否定的態度の割合は講義前から講義後にかけて有意に増加したが、4週間後には講義前と有意差がないレベルまで減少した。

表2 講義前、講義後、4週間後の否定的態度・肯定的態度の人数の変化
(2020年度・オンデマンド講義)

	講義前		講義後		4週間後	
そう思わない	7	否定	17	否定	10	否定
あまりそう思わない	16	23	24	41	21	31
ややそう思う	22	肯定	5	肯定	15	肯定
そう思う	2	24	1	6	1	16

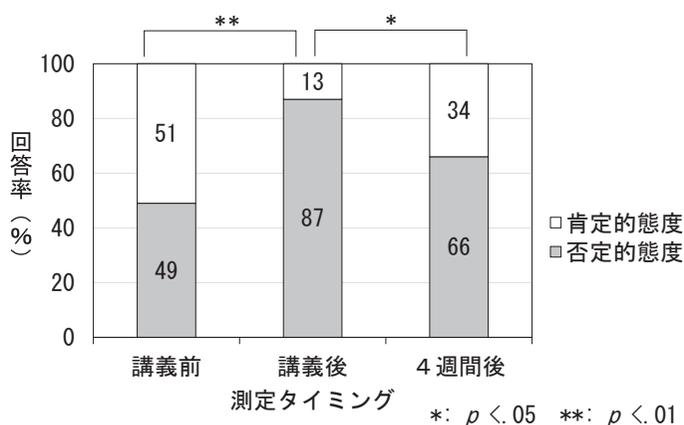


図3 講義前，講義後，4週間後の否定的態度・肯定的態度の比率の変化 (%)
(2020年度・オンデマンド講義)

否定的・肯定的な態度の理由

血液型性格判断に対して否定的である理由，肯定的である理由の自由記述を分類した結果を表3から表6に示した。否定的態度であっても肯定的な理由，肯定的態度であっても否定的な理由を記述した参加者が少数いたが，これらの回答はカウントしなかった。表中の太字はカテゴリ名，細字は項目名である。カテゴリの比率 (%) は，各カテゴリに該当する項目の比率 (%) の合計を示した（無回答の参加者もいたため，合計が100%にならない場合もある）。

まず2019年度の対面講義の結果を表3，表4に示した。血液型性格判断に対して否定的な理由（表3）として，講義前は「自らの経験」が53%と最多であったが，講義後は「授業（50%）」，「根拠がない（19%）」が多くなり，4週間後も同様の傾向であった（授業：44%，根拠がない：19%）。次に血液型性格判断に対して肯定的な理由（表4）として，講義前は「自らの経験」が67%と最多であったが，講義後は「サブタイプ（50%）」，「自らの経験（25%）」に分かれ，4週間後は再度「自らの経験（88%）」が最多となった。

表3 血液型性格判断を否定する理由 (2019年度・対面講義)

	講義前	講義後	4週間後
参加者数	19	36	32
授業	5%	50%	44%
授業で学んだ	5% (1)	50% (18)	44% (14)
根拠がない	11%	19%	19%
血液型性格判断には根拠がない	11% (2)	19% (7)	19% (6)
自らの経験	53%	15%	9%
自分や身の回りの人に あてはまらない人がいる	37% (7)	3% (1)	
同じ(異なる)血液型でも 性格が違う(同じ)人がいる	11% (2)	6% (2)	9% (3)
自分に、他の血液型の特徴があてはまる	5% (1)	6% (2)	
サブタイプ	0%	8%	12%
すべての人にはあてはまるわけではない 一部しかあたっていない		8% (3)	9% (3) 3% (1)
メディアからの情報	0%	0%	0%
テレビなどで見た			
その他	27%	11%	28%
性格は後天的なものである(環境で決まる)	11% (2)		3% (1)
誰にでも当てはまることが書かれている			3% (1)
その他	16% (3)	11% (4)	22% (7)

太字はカテゴリ名, 細字は項目名, カッコ内は人数を示す。
カテゴリの%は, 各カテゴリに該当する項目の%の合計を示した。

表4 血液型性格判断を肯定する理由 (2019年度・対面講義)

	講義前	講義後	4週間後
参加者数	21	4	8
自らの経験	67%	25%	88%
自分や身の回りの人にあてはまる	48% (10)	25% (1)	75% (6)
自分の人間関係(相性)に 血液型が影響しているから	19% (4)		13% (1)
メディアからの情報	34%	0%	0%
性格診断や占いが存在するから	29% (6)		
テレビなどで言っているから	5% (1)		
サブタイプ	0%	50%	0%
一部の人には当たっている			
当たっている部分と、当たっていない部分がある ある程度当たっている		25% (1) 25% (1)	
その他	5%	0%	0%
その他	5% (1)		

太字はカテゴリ名, 細字は項目名, カッコ内は人数を示す。
カテゴリの%は, 各カテゴリに該当する項目の%の合計を示した。

2020年度のオンデマンド講義の結果を表5, 表6に示した。血液型性格判断に対して否定的な理由(表5)としては, 講義前は「自らの経験」が52%と最多であったが, 講義後は「授業(44%)」「根拠が無い(41%)」が増加し, 両方で80%以上を占めた。4週間後には再び「自らの

経験（35%）」が増加し、「根拠が無い（26%）」が続いた。次に血液型性格判断に対して肯定的な理由（表6）としては「自らの経験」が講義前（75%）、講義後（67%）、4週間後（88%）の全ての時点で最多であった。

表5 血液型性格判断を否定する理由（2020年度・オンデマンド講義）

参加者数	講義前 23	講義後 41	4週間後 31
授業	4%	44%	13%
授業で学んだ	4%（1）	44%（18）	13%（4）
根拠がない	9%	41%	26%
血液型性格判断には根拠がない	9%（2）	41%（17）	26%（8）
自らの経験	52%	19%	35%
自分や身の周りの人に あてはまらない人がいる	26%（6）	12%（5）	19%（6）
同じ（異なる）血液型でも 性格が違う（同じ）人がいる	17%（4）	5%（2）	13%（4）
自分に、他の血液型の特徴があてはまる	9%（2）	2%（1）	3%（1）
サブタイプ	17%	5%	3%
すべての人にはあてはまるわけではない	4%（1）		
一部しかあたっていない	13%（3）	5%（2）	3%（1）
メディアからの情報	9%	2%	6%
テレビなどで見た	9%（2）	2%（1）	6%（2）
その他	34%	34%	32%
性格は後天的なものである（環境で決まる）	13%（3）	7%（3）	19%（6）
誰にでも当てはまることが書かれている	4%（1）	22%（9）	10%（3）
その他	17%（4）	5%（2）	3%（1）

太字はカテゴリ名、細字は項目名、カッコ内は人数を示す。
カテゴリの％は、各カテゴリに該当する項目の％の合計を示した。

表6 血液型性格判断を肯定する理由（2020年度・オンデマンド講義）

参加者数	講義前 24	講義後 6	4週間後 16
自らの経験	75%	67%	88%
自分や身の周りの人にあてはまる	71%（17）	50%（3）	88%（14）
自分の人間関係（相性）に 血液型が影響しているから	4%（1）	17%（1）	
メディアからの情報	4%	0%	13%
性格診断や占いが存在するから	4%（1）		13%（2）
テレビなどで言っているから			
サブタイプ	29%	0%	0%
一部の人には当たっている	4%（1）		
当たっている部分と、当たっていない部分がある ある程度当たっている	25%（6）		
その他	13%	33%	0%
その他	13%（3）	33%（2）	

太字はカテゴリ名、細字は項目名、カッコ内は人数を示す。
カテゴリの％は、各カテゴリに該当する項目の％の合計を示した。

講義の感想

講義の感想の自由記述を分類した結果について、2019年度の結果を表7、2020年度の結果を表8に示した。各年度とも、全体の回答中割合が多かった順に項目を並べた。また、講義後に否定的態度・肯定的態度だった参加者別の割合も算出した（無回答の参加者もいたが、参加者の自由記述が複数の項目に該当するケースが多かったため、合計は100%を超えている）。

表7 講義の感想（2019年度・対面講義）

参加者数	講義後の態度		
	全体	否定的態度	肯定的態度
参加者数	40	36	4
面白かった、興味深かった	33% (13)	33% (12)	25% (1)
血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった	33% (13)	36% (13)	
様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思いついでいることがわかった	20% (8)	22% (8)	
血液型や占いに影響されないようにしたい	20% (8)	22% (8)	
驚いた、ショックを受けた、がっかりした	15% (6)	17% (6)	
初めて知った	5% (2)	6% (2)	
多くの知識を得られた	3% (1)		25% (1)
多くの人に知ってほしい	3% (1)	3% (1)	
血液型と性格は（ある程度は）関連すると思う	3% (1)		25% (1)
その他	8% (3)	6% (2)	25% (1)

カッコ内は人数を示す。

表8 講義の感想（2020年度・オンデマンド講義）

参加者数	講義後の態度		
	全体	否定的態度	肯定的態度
参加者数	47	41	6
様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思いついでいることがわかった	66% (31)	68% (28)	50% (3)
血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった	43% (20)	39% (16)	67% (4)
驚いた、ショックを受けた、がっかりした	32% (15)	29% (12)	50% (3)
面白かった、興味深かった	19% (9)	20% (8)	17% (1)
血液型や占いに影響されないようにしたい	13% (6)	15% (6)	
初めて知った	11% (5)	5% (2)	50% (3)
多くの知識を得られた	4% (2)	5% (2)	
血液型と性格は（ある程度は）関連すると思う	4% (2)	2% (1)	17% (1)
多くの人に知ってほしい	2% (1)	2% (1)	
その他	2% (1)	2% (1)	

カッコ内は人数を示す。

2019年度は全体と否定的態度では「面白かった・興味深かった」という感想が多かった。また「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」、「様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思っ込んでいることがわかった」、「血液型や占いに影響されないようにしたい」などの知識に関する感想が多く、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情面の感想が続いた。肯定的態度では回答が分散し、「知識が得られた」と回答する参加者もいたが、講義後も「血液型と性格は（ある程度は）関連すると思う」とする参加者もいた。

2020年度は全体・否定的態度・肯定的態度とも「様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思っ込んでいることがわかった」、「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」などの知識に関する感想が多く、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情面の感想が続いた。否定的・肯定的態度の参加者間で大きな違いはなく、同様の傾向であった。

考察

本研究の目的は、血液型性格判断に対する態度を「否定的」「肯定的」の比率で測定し、講義によって態度が変化するかを検査することであった。そのため血液型性格判断を否定する講義を実施し、講義の前後で血液型性格判断に対して否定的に考えるか、肯定的に考えるかの態度を回答させ、短期的効果（講義前・講義後）、長期的効果（4週間後）を検査した。また講義形態として対面講義とオンデマンド講義の違いも検査した。その結果、対面講義・オンデマンド講義の両者において、講義の前後で血液型性格判断に対する態度は否定方向に変化し、短期的効果が見られた。よって、血液型性格判断を否定する講義の受講には、血液型性格判断に対する態度を肯定的な態度から否定的な態度に変化させる効果があることが示された。しかし効果の長さについては講義形態によって違いが見られ、対面講義では4週間後にも否定的態度が維持されていた一方、オンデマンド講義では4週間後には講義前と有意差の無い比率に戻っており、長期的効果が見られなかった。

オンデマンド講義において効果が持続しなかった理由については、いくつかの可能性が考えられる。一つ目の可能性は、講義が「授業」として記憶に残っていない可能性である。対面講義においては、否定する理由は講義後・4週間後とも「授業」であった。一方オンデマンド講義においては、直後は否定する理由として「授業」が最多であるが、4週間後には「授業」は少なくなっていた。対面講義は、大学の教室という大勢の学生と一緒に空間で受講するため、自宅にいる状況とはかなり異なっている。一方、オンデマンド講義は多くの場合自宅において一人でパソコンに向かって受講している場合が多いであろう。このような状況では普段の生活と講義の区別がつきにくくなり、「授業」としての記憶が薄れてしまう可能性があると考えられる。二つ目の可能性は、回答や講義視聴の信頼性の問題である。対面講義では教員のいる教室においてその場で回答させるため、比較的眞面目に回答していると考えられるが、オンデマンド講義では自宅の誰も見ていないところで回答するため、対面講義と比較すると回答が眞面目に行われていない可能性もある。また対面講義ではその場で回答するが、オンデマンド講義では質問を見て即座に回答しているとは限らず、回

答するまでの間に誰かと話したり、インターネットで情報を検索したり、書籍などを読む可能性は否定できない。また実際に動画視聴の直前・直後に回答したかは確認することができず、数は少ないと考えるが、講義動画を見ずに回答している人がある可能性もあると考えられる。三つ目の可能性は講義内容や講義の質の違いである。オンデマンド講義においては、対面講義で見せていたニュース映像を見せていなかったため、このニュース映像が何らかの影響を与えた可能性がある。また参加者は、対面講義においてはパワーポイントの配布資料のスライドの空欄を自分で記入しながら講義を受けていたが、オンデマンド講義ではパワーポイントのpdfファイルを配布されたのみであった。空欄を記入するという能動的な作業が、何らかの影響を与えた可能性もあるであろう。

次に、血液型性格判断に対する否定的・肯定的態度の理由について考察する。否定的態度の理由については、対面・オンデマンド講義とも講義前は「自らの経験」という主観的理由であったのに対し、講義以降は「授業」や「根拠が無い」などの客観的理由に変化する傾向がみられた。一方、肯定する理由は講義前・講義以降とも、一貫して「自らの経験」という主観的理由が多かった。上瀬他(1991)の研究においても、肯定する理由としては講義の前後とも「経験的理由」が多く、本研究の結果と一致している。しかし否定する理由に関しては、上瀬他(1991)の研究では「論理的理由」が講義前から約6割と多く、講義後に9割に達しているのに対して、本研究では講義前は主観的理由、講義後には客観的理由に変化するという点で違いが見られた。上瀬他(1991)の「論理的理由」と本研究の「客観的理由」は重なってはいないものの、完全に一致しているわけではないため、結果のずれはそのために生じた可能性も考えられる。今後は理由の自由記述の分類法についても検討が必要であろう。また、肯定する理由に関しては講義直後には「サブタイプ」も見られた。「サブタイプ」に関しては、上瀬・松井(1996)の研究でサブタイプ化する人は血液型ステレオタイプが変化しないことを述べており、その結果と一致すると考えられる。以上のように、否定的態度に変化する人が講義後には客観的理由を挙げているのに対し、肯定的な人は客観的データや講義内容よりも自分自身の経験という主観的理由を根拠として信じ続けていることから、肯定的態度をとり続ける人を客観的なデータで説得しても効果が薄いのではないかと考えられる。逆に考えれば「関連がない(はずれた)」という経験をすれば、態度が変わる可能性があると考えられる。

血液型性格判断を否定する講義の感想としては、「様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思い込んでいることがわかった」、「血液型と性格には関連がない(根拠が無い)ことがわかった」などの知識に関する感想や「面白かった、興味深かった」という感想が多く、学生が一定の興味を持ち、知識を身に着けたことが推測される。また「初めて聞いた」という記述自体は少なかったものの、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という記述の多さは、学生が今まで血液型性格判断を否定するような情報に接してきていなかったことを示唆しており、今後も講義やそれ以外のメディアを通して、正しい情報を伝える必要があると考えられる。

本研究では、講義により血液型性格判断に対する態度を肯定的から否定的に変える効果があることが示された。しかし講義形態により効果の長さの違いがあり、対面講義では4週間後も効果が維持されたが、オンデマンド講義では4週間後には効果が無くなっていた。否定的態度の理由

は、講義により主観的理由から客観的理由に変化した一方、肯定的態度の理由は一貫して主観的であった。参加者は興味をもって講義を聴いており、知識を得たことが明らかとなったが、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という記述の多さから、今までこのような情報に接してこなかったことが示唆された。今後の課題として、講義内容と講義形態のどちらが効果により大きな影響を及ぼすかについて検討が必要であると考えられる。また、肯定的態度の人は自身の経験という主観的な根拠を堅持していることから、自身の経験を信じる人に対して、どのように対応したらよいかを考える必要がある。今後は講義やそれ以外の機会を通して、より多くの人に正確な情報を伝えていくことにより、啓蒙していくことが重要であると考えられる。

注

- 1 本研究の一部は、日本心理学会第85回大会で発表した。

引用文献

- 古川竹二 (1927). 血液型による気質の研究 心理学研究, 2, 612-634.
- 伊藤哲司 (1996). 子どもたちは古い・血液型性格判断をどう捉えているか① 非科学情報にあふれた生育環境 児童心理, 669, 126-134.
- 上瀬由美子・松井豊 (1996). 血液型ステレオタイプの変容の形—ステレオタイプ変容モデルの検証 社会心理学研究, 11, 170-179.
- 上瀬由美子・松井豊・古沢照幸 (1991). 血液型ステレオタイプの形成と解消に関する研究 立川短大紀要, 24, 55-65.
- 松井豊 (1991). 血液型による性格の相違に関する統計的検討 立川短大紀要, 24, 51-54.
- 宮本博章・田村美恵 (1995). 血液型性格判断を斬る 菊池聡・宮元博章・谷口高士 (編著) 不思議現象何故信じるのか (pp. 138-143) 北大路書房
- 縄田健悟 (2014). 血液型と性格の無関連性—日本と米国の大規模社会調査を用いた実証的論拠— 心理学研究, 85, 148-156.
- 佐藤達哉 (1993). 血液型性格関連説についての検討 社会心理学研究, 8, 197-208.
- サトウタツヤ・上村晃弘 (2004). 血液型性格関連説の最近の動向と問題点 (2) 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 13, 56-57.
- 佐藤達哉・渡邊芳之 (1992). 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究 心理学評論, 35, 234-268.
- 白佐俊憲 (1991). 血液型性格判断の概観 北海道女子短期大学研究紀要, 26, 1-16.
- 上村晃弘・サトウタツヤ (2006). 疑似性格理論としての血液型性格関連説の多様性 パーソナリティ研究, 15, 33-47.
- 山岡重行 (2006). 血液型性格項目の自己認知に及ぼす TV 番組視聴の影響 日本社会心理学会第

47回大会発表論文集, 76-77.

山岡重行 (2011). テレビ番組が増幅させる血液型差別 心理学ワールド, 52, 5-8.